

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Goken News

No. 9 July 2003



イングランドはデヴォン州の漁村クロヴェリー：
村道が急斜面の石畳のため車は村内に入らず、
生活物資の輸送にはソリが使われる。

CONTENTS

- ・“春”(chūn) と “夏”(xià)
 (鄭 高咏)2
- ・含笑花 (矢田 博士)4
- ・韓国キリスト教と内村
 (常石 希望)6
- ・EU：フランスの語学教育
 リセ・インタ-ナショナル訪問記
 (平尾 節子)8
- ・アカデミーフランセーズは英語がおすすめ
 (木島 史雄)10
- ・英国の方言 デヴォン編
 (安藤 聡)12
- 海外最新事情16
 - ・イギリス
 - ・アメリカ
 - ・ドイツ
- ・フランス
- ・中国
- ・韓国
- 外国語コンテスト22
 - ・英語部門
 - ・ドイツ語部門
 - ・フランス語部門
 - ・中国語部門
 - ・韓国・朝鮮語部門
 - ・日本語部門
 - ・日本語コンテスト入賞作25
- 第1位 私の日本のお母さん
 (現代中国学部1年生 宇 莉莉)
- 第2位 私が感じた日本
 (経営学部1年生 白 宇)

“春”(chūn)と“夏”(xià)

法学部
鄭 高咏

春に萌え出した初々しい緑が、夏に向けて日に日に鮮やかになってきた。そこで今回は“春”と“夏”、この二つの漢字の成り立ちをたどってみることにしよう。

“春”の字源は甲骨文字にさかのぼることができる。最古の“春”の字(図)の左下に描かれているのは、地表に顔を出したばかりの新芽であるが、実はこの新芽自体、“屯”(zhūn)という一つの漢字であり、後漢の許慎が撰じた字書、『説文解字』は“屯”について、“屯、難也、像草木之初生屯然而难。”(屯とは難である。萌え始めた草木がかがまって苦しむ様をかたどっている)と述べている。つまり“屯”の字は地面(上の横棒)を突き破って生え出した1本の草の象形で、その根元が曲がっているのは、ようやく芽吹いた春の草木が、さらに伸びようとして必死にもがいている様を表しているというのである。この字を作り出した古代人たちは、小さな芽が地面から頭をのぞかせたころの姿を描写して春を表現しようとしたに違いない。また甲骨文には春の意味で“屯”の字を使っている記述がいくつか見られ、一例を

挙げれば、“壬子、^{みずのえね}貞今屯受年九月”(壬子の年、今年の春の作柄を占ったところ、9月に豊かな実りが得られると出た)という占いの記録があるが、この“今屯”は「今春」、「受年」は「豊作」のことである。甲骨文字以降、文字が統一されるまでに“春”には様々な異体字が作られ、書き方も時を追うごとに複雑になっていったが、いずれの“春”の字にも共通する特徴が二つあった。まず一つは“屯”で音を表していたことであり、これは甲骨文字、金文(図)、小篆(図)でも変わらない。もう一つは「草木」と「日」を組み合わせていた点で、この二つで草むらや木々の間から悠然と昇り来る太陽を表現し、暖かな春の日差しを象徴していたのである。

やがて秦の始皇帝の時代になると隷書が登場する。隷書は程邈^{ていぱく}なる人物が10年にわたる試行錯誤の末に考案したとされるが、この新しい書体では篆書の曲線的な要素が一切排されたため、漢字ははるかに簡便で書きやすくなった。その違いは“春”の下の“日”の字を見ても明らかで、小篆のそれは楕円形だが、隷書(図)ではシャープになっており、格段の進歩を遂げている。隷書の出現は古文(隷書以前の文字)と今文(隷書)の分水嶺となり、これを境に原始的な象形文字の記号化が始まった。この漢字の篆書から隷書への一大転換を“隶变”という。“隶变”を経た隷書の“春”の字にはもはや大きな変化は見られず、楷書(図)の“春”と比べても違いはほとんどない。

“春”は「四季の最初の季節」を表す字でもあり、中国では春の訪れ、つまり新しい年の始まりを旧暦の元旦に祝うが、この中国のお正月を“春节”という。「春の節気」という意味を持つ“春节”は中国人にとって年間最大のイベント、



図
(甲骨文字)



図
(金文)



図
(小篆)



図
(隷書)



図
(楷書)

最高の晴れの日であり、どこの家庭でも新年のお祝いをして、今年もいいことがありますようにと祈る。“春節”になくなくてはならないのが、門口の両側に貼る赤い紙、“春联”であり、新春にちなんだ文句が書かれていることから“春联”の名がある。ここで代表的な“春联”の文句を紹介しよう。まず“有天皆雨日，无地不春风”、これは、澄み渡った空からうららかな日差しが降り注ぎ、息を吹き返した大地に春風があまねく吹き渡る、という意味である。名句として知られる“一元复始，万象更新”には、年が改まって何もかもがまた一から始まり、森羅万象が新たな人生と発展を手にする、という意味が込められている。“三阳开泰，六合同春”は、新春が到来し、世界中が春の息吹と生気で満ち満ちる様を表したおめでたい言葉である。これらを見ても分かる通り、“春联”の言葉は必ず対句になっていて、門口の右側に貼る“上联”に前の句、左側に貼る“和選”に後の句を書き付ける。この“春联”とよく似たものに、縁起の良い語句が書かれた赤い紙、“春条”がある。“春条”もまた新春を祝うためのものだが、“春联”と違うところは、“春条”の言葉は中国人にはおなじみの、ごく身近なものであり、さらに対句でなくても、左右一対でなくても構わないので、どこにでも気軽に貼れる。この親しみやすさから“春条”は引っ張りだこで、家の中といわず外といわず、そこらじゅうにべたべた貼り付ける。このほか、“福”の字を書いて貼るのも“春節”の風物詩だが、この“福”の字は逆さまに貼るのが味噌で、その意味するところは“福到了”(fú dào le「福が来た」)、つまり“福倒了”(fú dào le「福が引っ繰り返った’)と語呂合わせになっているのである。

さて、春の話はこれぐらいにして、今度は夏について触れよう。

前述したように、甲骨文字に“春”はあるが、意外なことに“夏”はない。これは恐らく、古代人たちが季節を大づかみに捉えていたことによるものと思われる。そのころの最大の関心事は、何といっても年に2回訪れる夏と秋の収穫であり、

甲骨文字で書かれた占いの記録に“春”と“秋”の2字が出てくれば、それはまず間違いなく農業関連の記事であるという。専門家はこのことを根拠に、今から3500年前の殷代にはまだ季節は四つに分けられておらず、春と秋の区別があっただけで、春は夏の収穫を中心とした季節、秋は今日でいう秋と冬を合わせた季節であった、と考察しており、これに従うなら、季節を表す“夏”、“冬”の字が登場したのはもっと後ということになる。さらに“夏”の字には特筆すべき点がある。それは、“夏”が元々古代中国の王朝名であったことで、この王朝とは伝説上の聖王、禹が開いた“夏”であるが、後に“夏”は夏王朝のみならず、中国全体を指すようになった。すなわち中国の古称、“华夏”(華夏)の“夏”であり、いにしへの中国人は自分たちを“夏”と呼んでいた。中国最古の辞書である『爾雅』の『釈天』篇は“四时”(四季)という項目から始まり、そこには四季の特徴、固有名詞、別名などと共に、“夏”の語釈も記されている。いわく、“夏为昊天”(夏とは大空である)、“夏为朱明”(夏とは気が赤く輝くことをいう)、“夏为长(zhǎng) 贏(yíng)”(夏とは増え、満ちあふれることである)。ここで用いられている“夏”は、春と秋の間の季節を表すために古代王朝の名、“夏”を当てた「仮借(かしゃ、六書の一つ。ある語を表す漢字がない場合、意味に関係なく、同音の既成の漢字を借りて表現する方法)」と考えられる。

とりわけ日が長い夏は、気温、日当たりとも植物にとっては最良の時期といえ、草木はすくすくと葉を広げ、ぐんぐんと枝を伸ばす。そう、夏は繁茂の季節であり、戦国時代の偉大な詩人、屈原も『九章・懐沙』の中で、“滔滔孟夏兮，草木莽莽”(はつらつたる初夏、辺り一面に草木が生い茂る)と詠んでいる。また“夏”には「大きい」という



意味もあり、『詩経・秦風・權輿』に“于我乎夏屋渠渠，今也每食无余”（先王様のありがたい思し召しのおかげで私は大層大きな屋敷に住んでいるが、近ごろでは禄が減り、何とか暮らしているといった有様だ）とあるが、この文中の“夏屋”は「大邸宅」のことである。

この通り、“春”も“夏”も、その成り立ちを振り返ってみると、緑の香りがぷんと立ち上がってくる。草萌える春、木茂れる夏、この生气あふれる季節を表すのにこれ以上ふさわしい字はあるまい。

含笑花

経営学部
矢田 博士

草解忘憂憂底事

花能含笑笑何人

草は解く憂いを忘るも
底事なにごとをか憂えん

花は能く笑みを含むも
何人なんびとをか笑わん



丁謂（九六六～一〇三七）、^{あざな}字は謂之（後に公言と改める）、長洲（今の江蘇省呉県）出身の人。北宋の第三代皇帝・真宗の時に主に活躍し、宰相の地位にまで昇った。しかし、第四代皇帝・仁宗の時に、罪を得て崖州（今の海南省崖県）に左遷され、晩年をその地で過ごした。

冒頭に挙げた二句は、彼の「山居」と題する七言律詩の頸聯の二句である。丁謂自身が施した注に「海南に含笑花有り」とあることから、「山居」という詩は彼が海南島に左遷されていた時期の作と判断される。とりわけ頸聯のこの二句は、北宋の当時において早くも高い評価を得ていたらしく、例えば北宋・司馬光の『温公続詩話』に、

丁相謂 善く詩を為る。珠崖に在りても猶お詩有り、百篇に近し。『知命集』と号す。其の警句に「草は解く……、花は能く……」なるもの有り。

といった記述が見られることや、北宋・釈惠洪もまた『冷齋夜話』巻五の中でこの二句を引用したうえで、「世 以って工と為す。」と述べていることなどからも、その点が窺えるであろう。

さて、当該の二句には「忘憂草」と「含笑花」といった二つの植物が詠み込まれている。「忘憂草」は「萱草けんそう（諛草）」とも言い、この草を植えて玩味すれば、人の憂いを忘れさせることができると言われることから、その名がある。また、例えば「焉にか諛草を得て、言に之を背に樹えん」（『詩経』衛風・伯兮）や「懐ふところに忘憂草を挾む」（劉宋・劉義恭「遊子移」）、「萱草 解く憂いを忘る」（唐・白居易「酬夢得比萱草見贈」）など、古くから詩の中にも詠み込まれている。

ところが一方の「含笑花」については、唐代以前の詩に詠み込まれた例を私は寡聞にして知らない。試みに「故宮【寒泉】古典文献全文検索資料庫」の「全唐詩全文検索」によって、「含笑」という語の用例を調べてみたところ、人の微笑むさまを形容したものが圧倒的に多く、花が開き始めるさまを形容する例もわずかに見られるものの、

描写の対象として選ばれているのは桃花や棠花^{からなし}などであり、「含笑花」そのものを詠み込んだ例は一つも見られなかった。とすれば、丁謂の「山居」における頸聯の二句は、中国古典詩歌史の上で、「含笑花」という花を詩に詠み込んだ最も早い時期の例として位置づけられることになるであろう。

では、そもそも「含笑花」とは、いったいどのような花なのであろうか。南宋・陳善の『捫蝨新話』巻四「論南中花卉」の条によれば、

南中の花木に北地に無き所の者有り。茉莉花・含笑花・閻提花・鷹爪花の類なり。性、皆な寒きを畏る^{おそ}るを以てなり。……含笑に大小有り。小含笑、四時に花有り。然れども惟だ夏中、最も盛んなり。又た紫含笑有り。香り尤も酷烈^{もつと}たり。茉莉含笑あり。皆な日の西のかた入るを以て、稍や陰れば、則ち花開く。初めて開けば香り尤も鼻を撲つ。予、山居して事無く、每晚^{すす}涼みて小亭の中に坐す。忽ち香風一陣を聞くに、室に満ちて郁然^{いくぜん}たり。知る、是れ含笑の開けるを。

とあるように、「含笑花」には小含笑・紫含笑・茉莉含笑などの種類があり、濃厚な香りを放つことを特徴とする花であるらしい。また手許にある植物図鑑によれば、日本では「トウオガタマ」「カタネオガタマ」と呼ばれているものがそれで、「含笑花は中国原産の常緑低木で高さ3 - 5 m」「花はバナナのような強い香がある」と説明されている。

海南島をはじめ中国の南方を原産とするこの「含笑花」。実は意外なことに、我々の身近なところでも目にすることができるのである。四月二十九日の祝日に家族で名古屋市の東山動植物園に行った折りに、私は偶然それを見つけた。星ヶ丘門から入りなだらかな坂道を下っていくと、右斜め前方に池が見えてくる。その池の北側を通る小径の、その入り口あたりの人気^{ひとけ}のない場所に人知れずその花はあった。花はクリーム色で赤紫色の縁取り

があり、濃厚な香りを漂わせていた。妻はそれを熟したメロンのような甘い香りと表現したが、私には子供の頃に使っていたバナナ味の歯磨き粉^{にお}の匂いのように感じられた。また花びらを開ききらずに咲くその姿は、まさにその名の通り、口許^{くちもと}に手を当て「笑みを含み」ひかえめに微笑む上品な女性の姿を彷彿とさせる。

「草は憂いを忘れさせるというのが、草そのものにいったいどんな憂い事があるというのか。花は微笑むことが出来るというのが、いったい誰に微笑みかけているというのか。」——花は別に人に微笑みかけるために咲いているわけではないけれども、東山公園の「含笑花」は、確かに私に微笑みかけてくれていた。

韓国キリスト教と内村

法学部
常石 希望

(一) 周知のごとく、韓国はアジアに冠たるキリスト教国となって久しい。1990年代初期の報告による信徒数は、プロテスタント1100万人、カトリック300万人、合計1400万人。これは全人口の30%、国民の3.3人に一人がキリスト教徒となる(ここ数年来の報告では、1000万人、25%、4人に一人という数字を目にすることが多い)。いずれにしろ、いつまでたっても人口の2%前後の日本とは大違いだ。一体どうして、韓国はこれほどまでのキリスト教国となったのであろうか？

私はこれを重要な問いだと思っている。なぜなら、この問いは単にキリスト教という一宗教に限定される問題などではなく、むしろそこに韓国という国を解く「カギ」が隠されていると思えるからである。むずかしく言えば、韓国という国の文化と歴史の本質がこの点に投影されていると思えるからである。

(二) 興味深いのは、この問いをひっさげて韓国の牧師・長老といった自覚的キリスト者と話し合うと、必ずと言ってよいほど彼らのほうも「なぜ日本はそんなにキリスト者が少ないのか？」という問いを真剣にいただいているという点である。文化という現象の相対性を、改めて知らされる。彼らもこの点に、日本という国の文化と歴史の本質が宿っていると考えているのである。

ところで、私たちの問いに対して彼ら韓国のキリスト者が最終的に与えてくれる回答は、ほとんどの場合つぎのようなものである。「苦難の歴史を歩んだユダヤ人・イスラエルの民は、神の前に過ちばかりを繰り返した民族であった。しかし、神はその民を神の民（選民）として選んだ。同じように苦難の民、さして優れてもいない、欠点の多いこの韓民族・韓国を神が選ばれたのだ」と。つまり、「イスラエル」と韓国を並べ、両者が共に「苦難」の歴史を歩んだ点に共通点を置き、神の一方的な「選び」に結論を置く。以上が純粋なキリスト教信仰レベルから提出される、代表的回答である。補足して言えば、キーワードの一つは「苦難」である。この「苦難」とは、一方では例えば『苦難の韓国民衆史』の中で咸 錫憲（ハム・ソクホン）が説く韓国独特のキリスト教史観を意味しており、他方この「苦難」とは主に秀吉による侵略および「日本によって国を奪われた歴史」を意味する。

(三) 実は内村鑑三も、ほぼこれと同じ主張、つまり「神の選び」に韓国キリスト教隆盛の主要な原因を見出すという主張をしている。

内村は1894年の「日清戦争」では、きわめて積

極的な義戦論者として立つ。「日清戦争」とは端的に、朝鮮半島をめぐっての日・清の覇権戦争である。内村は“Justification of Corean War”という日清戦争の義しさを英文で書き、世界に宣伝しようとした。これは同1894年に『日清戦争の義』として日本語に訳されるが（注目すべきは内村は「日清」戦争を“Corean / Korean War”としている点）、そのなかで内村は言う。遅れた朝鮮に進んだ文化を教え、朝鮮の民を開化し導くのは中国の役割ではなく、それは東洋にあって唯一の進歩国である日本の使命であり、『日本の天職』である、と。当時、かかる進歩史観に根ざした朝鮮教化論（朝鮮支配論）は、内村であれ、福沢諭吉であれ、日本の知識層に一般的な見解であった。ただ内村の場合は、「朝鮮はキリスト教の伝播発達が著しく遅れている、清国しかり、従ってアジアにおけるキリスト教先進国である日本が朝鮮にキリスト教を伝えなければならない」、という「キリスト教」の視点を基軸としていた。

ところが日露戦争（ここでは彼は非戦論者として立つ）などを経て、1909年の内村はこれが大変な間違いであったのに気付くように記している。

「神はかえって朝鮮を救いて、日本を棄て給うたのではあるまいか。」余輩（私）はこのことを思ひ、精神的に暗愚なる日本を去って、自らも外国宣教師の一人となりて、その教化を助けようと思った（いずれも『聖書之研究』1909,12月号、一部現代語化）。つまりここで内村は、「神は朝鮮を選ばれた」「日本を捨て、神は朝鮮を救い、朝鮮のほうを選ばれた」と言っているのである。そして「出来ることなら、神が選んだその朝鮮に宣教師として行きたい」とまで言うのである。また、このころから内村は、自分の「真の後継者」はむしろ朝鮮の信仰の友や弟子たちであろう、という発言をしばしばなすようになる。彼の友・弟子とは、のちの韓国キリスト教の偉大なる精神的指導者となった、咸 錫憲（上述）、金 教臣（キム・ギョウシン）、金 貞植（キム・ジョンシク）といったソウソウたる人物たちであった。

「なぜ韓国では、これほどキリスト者が多くなったのか?」。現代の韓国の牧師・長老も、また1909年の内村鑑三も、等しくそれは「神の選び」だと言う。しかし内村は、いまだ韓国キリスト教の草創期において、いまだ韓国のキリスト者が2%前後しかいなかった時代に、後の韓国キリスト教の隆盛と、後の日本キリスト教の衰退とを鋭く洞察し、正確に予言したのであった。「預言者、内村」と呼ぶにふさわしい。

(四) 「なぜ韓国はアジアに冠たるキリスト教国となったのか?」。もとより、この問いに対し、上とは異なるレベルの回答を求めようとする見解も多い。

例えば、柳 東植博士はその真の理由・原因を「韓国の固有文化」のなかに見出そうとする。つまり、シャーマニズムという韓国の基層文化自体が、もともとキリスト教と共通する要素を豊かに有していた点に、回答を求めようとする。

あるいは、政治史的な説明。つまり、アジア植民地化のなかで中国ほかほとんどの国が、欧米というキリスト教国によって侵略され、そのため反キリスト教へと傾きやすかったが、韓国（および台湾）だけは欧米キリスト教国ではなく「日本」という神道国によって植民地化されたのであった。

さらに上にも関連し、韓国独立運動とキリスト教との深い関係分析による説明や、アメリカという国家との関係から説明するものなど、回答は多い。

EU：フランスの語学教育 リセ・インタ・ナショナル訪問記

法学部
平尾 節子

フランスの外相、ロベール・シューマンは、1950年5月9日、「シューマン宣言」と呼ばれるプランを発表した。当時、二度にわたる世界大戦により、疲弊したヨーロッパの市民は真に平和を希求していた。シューマンは、世界平和を実現するには、紛争、大戦の原因となってきたヨーロッパの石炭・鉄鋼産業を、ヨーロッパ諸国が共同で管理するという壮大な計画を具体化することが、最良の方途と提唱し、フランス・ドイツをはじめとする6カ国の欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）を創設した。この「シューマン宣言」によって、今日のEU（ヨーロッパ連合）統合の歴史の幕が開けたのである。

現在、EU加盟国は、15か国で、11の公用語を有している。2004年には、EUは、25カ国に拡大し、その公用語は20カ国語へと、倍増する。EUの言語政策の目的は、平和と調和、多言語・多文化・多民族の共生と発展である。

「EUの多様な言語は文化遺産である」という観点から、EUは2001年、“The European Year of Languages 2001”「ヨーロッパ言語年」を提唱した。その新教育プログラムの目標は、Pluri-lingualismであり、Pluri-culturalismである。複数言語「1+2」、すなわち「母語プラスEUの2か国語」以上の言語習得と、多文化教育を推進することを目的としている。



フランス教育省：メゾン・デ・ラング

フランスの教育改革

今回、2003年3月、筆者は、EUの言語政策の一環として、フランスの言語教育に関する調査・研究のため、フランス教育省を訪問した。友好的な大歓迎をうけ、3日間にわたって、初等・中等・高等教育における教育改革についてのプレゼンテーションと資料提供を得た。Mme Daniele Limonが3日間の訪問プログラムを企画して下さった。初日の午前は、フランスの教育制度と、教育改革全般についてであった。

フランスの教育改革の第一の重点事項は、外国語教育である。「フランス語、およびフランス語以外の2言語の習得を教育の基本的目標の一つとする」として推進している。「複数言語が使えること、文化の多様性に触れることは、流動的且つボーダレス化する国際社会に生きていく若者を育てるために重要な意義をもつ」ことが、教育省からの通達で強調されている。

第一目標は、「生徒すべてが、中等教育修了時に、フランス語以外に、少なくとも2言語を「聞く・話す」、「読む・書く」、の両面で使えるようにすること」である。そのために、小学校における外国語教育導入、および、中等教育修了時までの第2外国語学習の必修化を推進している。高校では、第3外国語学習の機会を与える。

現在、2000年就任のジャック・ラング教育大臣のもとで、強力な推進政策が展開されている。

2003年度：小学校第2学年で外国語学習完全実施
 2004年度：小学校第1学年対象の外国語学習実施
 2005年度：幼稚園年長児クラス対象の外国語学習実施、および、中学1年生の第2外国語学習の必修化である。

バカロレア

初日の午後は、Dr. Nicolas Marques によるバカロレアに関するレクチャーであった。Mr. Jacque Michel が、私のために、フランス語から英語への通訳を担当して下さいました。

バカロレアは、リセ（高校）修了資格、および大学入学資格をあわせて認定する国家資格である。バカロレア資格試験は、1808年に始まり、当時は、ギリシャ語、ラテン語の修辞学、歴史、哲学の口答試問の形式であった。

現在は、次の3種類のバカロレア試験が、筆記と面接で、毎年、6月、全国一斉に実施される。

- 1) The Baccalaureate Academic : 普通バカロレアは、1993 以来、(1)経済・社会学系 (2)文学・語学系 (3)科学系の3つのカテゴリーで実施され、合格者は大学への入学資格が得られる。
- 2) The Baccalaureate Technological : 技術バカロレアは、1968年に創設された。合格者はポリテクニクへ進学する。
- 3) The Baccalaureate Vocational : 職業バカロレアは、1985年創設の職業資格である。

バカロレアの外国語試験は、フランスの地方言語も含め、40か国語以上から選択可能である。特に、バカロレア資格試験の特徴は、文章による表現力と口答試験が重視されることである。筆記試験は、どの科目も論文形式で、文系では作文、理系では論理の構成力が重んじられる。合格すれば、教育大臣からバカロレア資格という国家資格が与えられ、全国の国立大学のいずれにも入学できる。

バカロレア試験は、受験者の数と関係なく、決められた水準に達していれば、合格できる。1999年のリセ（高校）3年生の受験者は63万3千人で

あった。合格率は、1945年3%、1975年に、25%、2000年には、61.5%になったが、2004年までに同一年齢層（18歳人口）の80%が目標であるという。

バカロレアに合格すれば、国立大学への入学資格を得る反面、失敗した場合には、大学へ進学できないばかりでなく、3年間のリセ（高校）の卒業資格が認められないことになる。リセの最終学年には、1年しか留年できない。また、バカロレア試験は、2回しか受験できないという。

Dr. Nicolas Marques は「バカロレア・インターナショナル」（OIB）の重要性も強調された。新たに、フランス教育省と日本の文部科学省が合意に達し、実施されることになったものである。普通バカロレアの「第1外国語」に代わって、「当該国の国語」で受験する。しかし、バカロレア合格のための点数の割当ての中で、係数が高くなる。文学・語学系の普通バカロレアでは、「第1外国語」の係数が4であるのに対し、OIBの国語は10となる。バカロレアを国際化しようとするフランス教育省の意欲的な政策である。

バイリンガル・バイカルチャー教育

Dr. Nicolas Marques の紹介で、リセ・インターナショナル校長、Mme Halle を訪問した。

サン・ジェルマン・アン・レイを訪れたのは、パリでは、珍しく晴天の日であった。Mme Halle は、明るく、にこやかに、突然の訪問客を快く迎えて下さった。

リセ・インターナショナル校は、今年、創立50周年を迎える。幼稚園から高校までの一貫教育の国立の学校で、徹底した二か国語教育・二文化教育に取り組んでいる。共通言語が、フランス語で、そのフランス語を基軸として、12の外国語のセクションがある。英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、オランダ語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、ポーランド語、日本語。実に、多言語・多文化教育である。バイリンガル・バイカルチャー教育を実現していくための大切な

ポイントは、という質問に、「小学校で学習することが一番の基本・土台です」ときっぱり即答。「十分な表現力、それも書く能力まで含めた十分な表現力を養うことは、並大抵のことではありません。子どもが、モチベーションを持ち続け、深めていくためのバックアップも必要でしょう」

「二か国語教育・二文化教育を通して、若いヨーロッパ市民、世界市民を育てることが目標です」と、Mme Halle の瞳は、輝いていた。

授業参観にも快く応じ、教室に案内して下さいました。まずは、小学校3年生の英語の授業。洋の東西を問わず、子どもたちは可愛い。みんな元気活潑としていた。自分の好きな本を選んで、読後、そのストーリーのサマリーと、感想をクラス全員の前で発表する。そして、クラスメートからの質問に答える姿は、真剣そのものであった。先生からの指名ではなく、児童たちが自発的に積極的に進んでプレゼンテーションをする姿に感動した。

次は、中学1年の日本語の授業。やはり、一人ずつ、教室の前へ出て、発表する。大きな声で、朗読、暗誦し、誇らしげであった。外国語としての日本語の授業を、リセの予算で開講し、第二外国語、第三外国語のステータスで、バカロレアの外国語として選択する。フランスと日本の関係はさらに緊密なものになるであろうと期待して、夕暮れのサン・ジェルマン・アン・レイの町を後にした。

「愛知大学 研究助成」による



リセ・インターナショナル

アカデミーフランセーズは 英語がおすすめ

現代中国学部
木島 史雄

ユーストンのホテルを出て Marchmont street を南へ。絵はがきを出そうと郵便局に立ち寄ったら、切手と一緒に「PAR AVION」と印刷したシールをくれた。航空便という意味である。何とも親切なことだとも思ったし、今どきはがきを船便で出す者もいないだろうとも思った。ひとまずそう考えて歩き出したが、このシールを受け取ったときの、中途半端なしっくりしない感じは消えなかった。地下鉄の駅のをきまできて、これがフランス語であることに気づいた。じゃあフランス語だとなぜ落ち着かないのだろう。

フランス人が英語を話さないというのはおおかた嘘である。少なくとも、彼らは気位が高いから話さないのだというのは、まず間違いなく嘘である。以前パリのカフェで、牛乳がほしくて、そう、カフェ・オ・レのレだからなあとと思ってギャルソンに「レ・レ」と繰り返したら、「ミルク？」と確認されたことがあった。パリでは英語はかなり通じる。ではぎゃくに英国人はフランス語を使うだろうか。空港でも、地下鉄でも、わりあいと英語の表記だけですましているように思われる。発音するときの私の口の格好をみてでもあろうが、英語がわからないなら、じゃあフランス語はどうだと訊ねられたことは一度もない。よく噂になる「フランスでは英語が通じない」という話よりも、「英国ではフランス語が通じない」というほうが蓋然性は高いように私にはおもわれる。それで、ロンドンで出会った“PAR AVION”に奇妙な感

じを持つのであるに違いない。Russell Square の噴水の脇をとおりながらそう考えた。

大英博物館にはいると、長く続いていた改修工事もほぼおわって、円形大閲覧室の周りに屋根がはられ、ずいぶん様変わりしていた。アッシリアのレリーフを見たあと、エトルリア文化の展示室へ行こうと思ったが、毎度の事ながら行き方がわからない。館員に尋ねたが、「そんなの知らないよ」という返事である。「ローマより前のイタリアの文明で…」と説明したら、それなら71か、72号室のへんだよきつと、と言う。彼らは一日中、「ナントカはドコ？」式の質問にさらされているのだろう。しかもあまり整っているとは言い難い英語で迫られることが多々あるであろうと、自らの例に照らして、考えた。仕事とはいえ、大変なことである。

ところで現在、英語は国際共通語である。ヨーロッパでも、母国語とするのはアイルランドと英国だけであるにもかかわらず、ほとんどの国でかなり英語は通じる。ウィーンから日本に小包を送るのにも、プレーメンの百貨店でチョコレートを買うのにも、ずいぶん英語の世話になった。英語は、それを母国語とする者同士および、英語圏人と他国人との間のコミュニケーション手段であるだけではなくており、もはやかれらの独占物ではない。独占物でないどころか、彼らに英語に対する優先的発言権はなくなっていると私は思う。国際共通語とは、その言葉を母国語としない者同士のコミュニケーションにおいても、その言語が用いられるということであろう。かつてラテン語は西欧学術いっばんにおける国際共通語であったし、ドイツ語は近代医学における国際共通語であった。フランス語にも、外交における国際共通語であった時代があり、件のはがきに“PAR AVION”と記されるのは、フランス語が万国郵便条約の公用語であるからにほかならない。

ところでそれまで民族言語であった英語が、あるとき国際共通語になると宣言した。最初は、世界中の誰も彼もが自らの言葉を話してくれると喜んだかもしれないし、我が国力を持ってすればそ

れくらいは当たり前だと考えたかもしれない。しかしかれらは、自分たちの言葉が国際共通語になるということの功罪を十分に考えたのであろうか。

承知の上でこの選択が行われたのであるなら、英語圏人とフランス人の間で、自国語についての意識が大いに異なっていたことは確かである。フランス人は、フランス語を自らの支配下に引き続き、フランス語の純粋性をまもる、すなわち訳のわからぬ奴らにフランス語を勝手に使われてフランス語が乱れてゆくことを防ぐために、フランス語を国際共通語にしなかった。いっぽう英語は国際共通語になり、その裏返しとして必然的に、この言葉を母国語とするアイルランド人および英国人の、英語への優先的発言権は放棄された。すなわち、「英語ではこうは言いません」という権利はもはや彼らには無い。実に世界中の人々は、英語に対して平等な発言権を持っているのであって、ブレイメンの百貨店員と私が、英語を用いて確実・的確にチョコレートの売買交渉をこなすことができたとすれば、それが英語圏人からみてどんなに奇妙な用法であっても、非難されるいわれはない。たしかに彼らは、英語による言語伝統・文学伝統を持っている。しかしそれは、あくまで「国文学」としての伝統であって、国際共通語である英語とは、直接的には関係ない。もしそこに彼らが口を挟む余地があるとすれば、伝統的用法を用いれば、英語によるコミュニケーションに揺れが無くなり、情報の伝達が正確で確実になるかもしれない、と意見を述べることができるにとどまる。

いっぽうフランス人は、積極的に英語を話すのである。外国人に向かって英語を話し、いい加減な英語でのコミュニケーションを厭わない。またそれによって、不純なフランス語が話されるのを防いでいる、少なくとも、一民族言語として、フランス語についてのあらゆる決定権をフランス人は持っているのである。すなわち正しいフランス語を決める機関として1635年に設立されたアカデミー・フランセーズ (Académie française) は、その権利を厳然として現在も、全世界に向かって保持している。フランス人は、気位が高く、そし



3月のパリの空

てフランス語を大事にしているからこそ、英語を話すのである。

ところで英語はこれからどうなってゆくのだろうか。私の専攻・研究する中国古典漢文は、上の二つの類型から言えば、英語に近い。文言文である古典漢文は、民族言語をこえて、東アジア全体の国際共通語であった。そして国際共通語としての歴史が古いこともあって、含意に富んでコンパクトで揺れないコミュニケーションを可能とし、それを保証するために、背後に大きな古典群を持っている。古典漢文によるコミュニケーション保証の仕組みと可能性を追いかけるのが私のしごとである。現代英語は、「英会話学校」的な当座のコミュニケーションを目指し、あらゆる用法を飲み込んで、融通無碍に変化してゆくのだろうか。それとも古典漢文のように、何らかの保証システム構築へと向かうのだろうか。ブルームズベリーの風に吹かれながら、そんなことを考えたのであった。

英国の方言 デヴォン編

経営学部
安藤 聡

英語にもさまざまな方言がある。英国語と米国語はまさに関東の日本語と関西の日本語のような関係にあるし、カナダの英語は標準的な米国語と明らかに異なる。アイルランド共和国の第二公用語である英語（第一公用語はあくまでもアイルランド語）はジョナサン・スウィフト（1667～1745、『ガリヴァー旅行記』の作者）によれば「世界で最も美しい英語」なんだそうだ。さらに、世界中には英語を母国語としないが英語を共通語として用いている地域があり、それぞれが発音、語法ともに独自の英語である。例えばマレーシアで人にものを丁寧に頼むときには、‘Will you please ~?’ と言う代わりに ‘Will you sir ~?’ と言う。

英国の中だけでもイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドにはそれぞれ独自の英語がある。「英語」を英語で「イングリッシュ」と言うくらいだから、イングランドのそれが「標準」なのかと言えば、話はそれほど単純ではない。イングランドの中にも気が遠くなるほど多くの方言があるのだ。

イングランドの方言には「縦」と「横」がある。「縦の方言」とは階級の「方言」のことであり、いわゆる上流階級の英語、中流階級の英語、労働者階級の英語という区分になる。いわゆる「クイーンズ・イングリッシュ（国王が男性の時はキングズ・イングリッシュ）」は狭義では王室の英語、広義では上流階級と上層中流階級（聖職者や研究者、それに弁護士や会計士などのいわゆる専門職

階級)の英語を意味する。この階級の英語にも色々なヴァリエーションがあり、「クイーンズ・イングリッシュ」イコール「標準語」ということにはならない。「模範的な英語」の代名詞とよく言われる「BBC英語」もまた、BBCのアナウンサーが話す「特殊な」英語だ。例えば「プライベート」を「プリーヴァシー」と発音したり、朝のニュースでの挨拶が‘Very good morning to you.’ だったりする。一方「横の方言」とは言うまでもなく地理的な方言のことで、実は「縦の方言」と「横の方言」は密接に関係している。なぜなら、上流・中流階級の人々の話し言葉はどこの方角に行ってもそれほど激しくは異なる。横の方言それぞれの特質を最も伝えているのは多くの場合労働者階級の人々なのである。イングランドの標準語は英語音声学の世界では「RP」すなわち「容認発音 (Received Pronunciation)」と呼ばれるが、これは「ロンドンとプリストルを結んだ直線より南側に生まれ育った学のある人が話す英語」と定義されている。面白いことに、その「学のある人」養成所の頂点であるはずのオクスフォードとケインブリッジが、この容認発音の境界線より北にある。

と、ここまでは前置きである。今回はデヴォン州の方言についてお話ししたい。デヴォンはイングランド南西の半島の付け根に位置する、南北に海岸と中央に大丘陵地帯を有する風光明媚な地方である。かつては「デヴォンシャー」と呼ばれていたが、現在は「デヴォン」である。州都として古都エクセターが、第二都市として港町プリマスがある。デヴォン全域が、容認発音の境界線よりは確かに南であるが、この線より西に大きくずれている。

愛知県内でも名古屋弁と三河弁にはかなりの違いがあるが、デヴォンの中でもそれぞれの地域によって方言がかなり異なる。ここではデヴォン全体に共通して見られる特徴をいくつか紹介しよう。まずは一般動詞の過去形と過去分詞形が、原則としてすべて「~d」「~ed」になる。「go - went - gone」は「go - goed - goed」、*「sing - sang -*

sung」は「sing - singed - singed」である。いちいち変化形を覚えなくて済むから楽でよい。

この地方の方言には‘are’というbe動詞が存在しない。一人称複数（つまり‘we’）および二人称（単数でも複数でも‘you’。ついでながら、‘you’は<ひとりでも複数>と覚えておこう）のbe動詞の現在形は‘are’ではなく‘am’か‘is’か‘be’のいずれかになる。人称代名詞は主格（I, we, he, she など）の代わりに目的格（me, us, him, her など）が使われることが多い（ただしhimはあまり使われず、男性についてもherが使われ、後述のように‘er’になる）。また無声音の子音（f, s, t など）が有声音化する（v, z, d などになる）。たとえば「見る」（see）の過去形・過去分詞形は‘zee’d’、「言う」（say）の過去形・過去分詞形は‘zed’だ。そして、語尾の子音‘n’は‘m’に変わることが多く、例えば‘Devon’は‘Devom’になり、さらに‘Deb’m’とか‘Dem’などになったりする。ここまでを復習すると、‘We are from Devon.’は‘Us is vrom Deb’m.’あるいは‘Us be vrom Dem.’になる。

ロンドンの下町方言、いわゆる‘Cockney’と共通する特徴もある。それは語頭の子音‘h’の脱落である。映画『マイ・フェア・レディ』の主人公のcockney娘イライザはヘンリー・ヒギンズ先生の名前を「プロフェッサー・エンリー・イギンズ」としか発音できなかった。一方でcockneyでは二重母音「エイ」は「アイ」になるが（したがって『マイ・フェア・レディ』というタイトルには「わが麗しの淑女」という意味の裏に「メイフェア（ロンドン的高级住宅街）をマイフェアと発音する姉ちゃん」という意味が隠されている）、デヴォン方言では二重母音「エイ」は長母音「アー」になる。また語中の長母音「イー」が「エイ」と発音される。したがって‘cake’は「カーク」、「hay fever」（花粉症）は「アー・ヴェイヴァー」、そして‘seaside’は「ゼイザイド」だ。途中の母音が脱落する場合もあり、例えば「既婚の」（married）は「台無しにされた」（marr’d）になってしまったりする。

日本人は一般に英単語をカタカナで表記するとき、長母音と二重母音の区別にきわめて無神経である。例えば‘communication’を「コミュニケーション」、「boat」を「ボート」と書いて平気な顔をしているが、前者は正しくは「コミュニケイション」、後者はあまり正しくないが強いて言えば「ボウト」である。「コート」と書かれていてもそれが‘court’か‘coat’か‘cote’のいずれであるか、場合によってはにわかには判断できない。「ロード」に至っては‘l’と‘r’の問題もあるので、「主」なのか「荷物」なのか、「道」なのか「乗った」のかよくわからない。なぜ唐突にこんな話をするかというと、デヴォン方言では二重母音「オー」が長母音「オー」になってしまうので、日本人的カタカナ表記にとっては都合がよいのである。たとえば‘old’は本当は「オールド」でなければならないが、デヴォン方言なら「オールド」でよい。「ホーム」（home）は正しくは「ハウム」でなければならないが、この地方では「オーム」だ。デヴォンの文学的英雄として讃えられているチャールズ・キングズリー（1819~75）はエクセターとプリマスのほぼ中間に位置する‘Holne’という小さな村の出身であり、この地名の発音をカタカナでなるべく正しく書こうとすると「ホウン」だが、地元では単に「オーン」と発音される。デヴォンの北海岸にウェストウオード・ホウ！という変な名前の町（感嘆符つきの地名は世界中でもここだけだろう）があるが、これはキングズリーの冒険小説『ウェストウオード・ホウ！』（*Westward Ho!*）にちなんで名付けられた。このタイトルは「西行き出航！」という意味の船乗りの掛け声だが、デヴォン風発音をカタカナで表記すると「ウェストウオード・オー！」になって、よりいっそう掛け声らしくなる。

デヴォンでは‘e’で始まる単語に気を付けなければならない。語頭の‘エ」は必ず「イ」か「アエ」のいずれかになってしまうので、‘end’は「アエンド」、「every」は「イヴリ」になる。また‘u’の短母音（cut, judgeなどの‘u’）と二重母音‘oi’（noise, boilなど）はいずれも短母音「イ」

になる。したがって‘put’は「ピット」、‘join’は「ジン」と発音される。同様に‘boy’は「ビー」だ。ついでながら、愛媛方言では女の子が「びー」、男の子は「ぼー」である。

一方でありがたいことに、日本人やフランス人が苦手とする子音‘th’がデヴォンでは発音しやすくなることがある。無声音の‘th’(throw, thinなど)が‘d’に置き換わり、数字の‘3’が‘dree’になったり、デヴォン地方にもよくある「草葺き屋根の家」(thatched cottage)が「ダッチト・コティッジ」になったりする。「アザミ」(thistle)はデヴォン西部では‘dashel’、東部では‘doishel’になる。また語頭、語尾の‘th’は脱落することも多く、‘that’は「アット」、‘with’は「ウィ」になる。

デヴォン方言には次のような奇妙な特徴もある。まずは、子音‘r’が勝手に移動して、‘run’が‘urn’になったり‘print’が‘pirnt’(‘pernt’と綴られることもある)になる。また‘sk’は前後が入れ替わって‘x’になり、例えば‘ask’は「アクス」と発音される。さらには、(おそらくは)聞き間違いがそのまま定着したとしか思えない語彙がいくつかある。例えば「原稿」(manuscript)が「熱狂者の借証券」(mania-scrip)、「肉屋の肉」(shambles meat ‘shamble’は肉屋のカウンター。農場の自家製肉と区別するためにこのような語句がある)が「鉱山発掘友達」(shammel-mate)、「先祖」(ancestors)が「伯母姉妹」(aunt-sisters)、「兆候」(symptom)が「ツェツェ蠅の大馬鹿野郎」(zim-tim)といったものだ。ことによると、面白がってわざと間違えているうちに定着したのかも知れない。

最後に、デヴォンに特有の言い回しや熟語をいくつか挙げておこう。普通は「外国へ」の意味で使われる‘abroad’がこの地方では「粉々に割れて」の意味でも使われる。たとえば‘My teacup fell off the table and went abroad.’と言われても、この用法を知らなければ「私のティーカップはテーブルから落下し、外国へ行った。」という訳の分からないセンテンスになってしまう。そ

れから‘Thank you’などのあとに付ける‘very much’はデヴォンでは‘billy-o’で、‘lak billy-o’の形で使われることが多い。また「コーンウォール人のお世辞」(Cornish compliment)とは「たいして価値のない贈り物」のことだ。コーンウォールはデヴォンの西隣の州である。そして‘Zindy-go-t’Matein’は主に衣服について使われる形容詞で「よそ行きの」という意味である。これはつまり‘Sunday-go-to-Matin’ということであり、「日曜日に朝の礼拝に行くための」という意味を表わす。田舎の小さな村の人たちは日曜日の朝にはたいてい教会に行くのであり、教会に行くときにはそれなりにちゃんとした服装で行くことから、このような意味になったのである。



(海外最新事情)

イギリス

英国的児童虐待防止法案

2003年5月5日(奇しくも日本では子供の日である)の『タイムズ』(オン・ライン)紙上に、'Childminders are to be banned from smacking' と題された記事があった。アメリカ語に慣れ親しんでいる日本の学生諸君には 'childminders' が見慣れない語彙かも知れないが、辞書を引く必要はない。文字通り「childをmindする人」つまりアメリカ語で言うところの 'babysitters' ということである。最近では日本語の中でも時おり外来語として「チャイルド minder」が使われるようだ。イングランドだけでも、本業副業を合わせると公的に登録されているチャイルド minder は7万人を越えるという。

記事によると、この秋から英国中のすべてのチャイルド minder は、たとえ依頼主(つまりその子供の親)の許可があったとしても、8歳未満の子供に体罰を加えることができなくなる。そしてこれは保育士、小学校教師にも適用されるという。児童保護団体はこの法律が実の親にも適用されることを望んでいるが、一方には親子関係にまで法律が干渉することを危惧する意見もある。この法案は同時にチャイルド minder や教師らに対して、子供がいる場所での喫煙をも禁じている。乳幼児突然死(cot death)の3分の2以上は親の喫煙が原因であることが10年も前に(ブリストル大学の研究によって)すでに証明されているのだから、この部分はいち早く実の親にも適用した方がよからう。

この法案制定の背景には、近年英国でチャイルド minder による児童虐待が増加(「顕在化」と言うべきか)していることがある。また一方では、国連が英国政府に圧力をかけた結果でもある。

(安藤 聡)

アメリカ

動詞が消える!? : アメリカのメディア英語における新たな現象

近年、アメリカのニュース・メディアにおける英語 特にニュース・リポーターの英語に異変が起きています。徐々に広まってきたこの特徴をとらえて、あるTV番組は“vanishing verb”と命名しました。“TV speak”と呼ぶ人もいます。たとえばこんな英語です。

Those negotiations continuing. Mr. Bush speaking to reporters earlier today: suddenly optimistic. (CNN: John King)
「交渉は続中。ブッシュ大統領、今朝リポーターに語り、突如として楽観の見方を。」あるいは、

A man alone as his wife sits in jail, admitting to killing her five children. (Correspondent)
「妻服役中、夫、妻の子供5人の殺害認める。」

もうお分かりでしょう。動詞がないんです。あっても助動詞が落ちていたり、現在形や現在分詞で語られる表現が中心になっています。特にニュース番組の特派員などが多用し、了解されている情報はどんどん省いて伝えるという方法です。むしろ、日本人にとっては特に驚くに値しないかもしれませんが、英語を習い始めた頃、「英語では、分かっているにもかかわらず“I”とか“he”などの主語をつけないと正しい文になりません」と聞いて、「なんで?」と、違和感を覚えた方もいるでしょう。日本語なら、「わたしは英語が大好きです。」なんて言うかわりに、「英語が大好きです。」とか「英語大好き。」で事足ります。ただし上述の表現は、日本語とは「省き方」が違うのでむしろ難しく感じるでしょう。

このような、いわば速記的スタイルは、30年ほど前のアメリカのメディアでは見られませんでした。各ニュース番組には専属の編集主任がいて、彼(女)らの原稿を金科玉条のごとく正確に読むことが求められた時代でもありました。この時代の業界を知る人によれば、編集主任は「神」のような存在で、慣れない新人記者をいびることも度々だったそうです。(恐らく日本と変わりませんね。)なぜこんなに変わったのかといえば、やはり、多発するさまざまなニュースを時間の枠内に収めるための対応策ということになるでしょう。新聞の「見出し」などからの影響もありそうです。またある記者は、友人に話すように話しているだけだとも語っています。つまり、「ニュース英語」というジャンルが崩れ、一般の簡略化した話し方がメディアに進入し始めたということです。逆に、そのような話し方を取り入れることで、メディアそのものが刷新を図っているのかもしれない。なにせ新奇さが「売り」なのですから。

しかし、このような英語は近年の産物ではありません。“Brevity is the soul of wit.”と喝破したのは Shakespeare です。リア王にも“O me, my heart, my rising heart! but, down!”と嘆かせています。感情移入を強いるというか、共有知識を過信するというか…。いずれにせよ、それらを持たない者にとって厄介な代物であるのは確かです。

関心のある方は、

<http://www.pbs.org/newshour/media/verb/>
をご覧ください。(片岡邦好)

ドイツ

「作家の妻」という生きかた

2003年になって、ある女性の伝記が二冊相次いで出版された。その女性の名は、カーチア・マン、作家トーマス・マンの妻である。彼女の夫は世界的に有名な作家であり、その兄ハインリヒも、また息子クラウスもゴーロも、娘のエリカも著述でその名を知られている。

そんな作家の一族の中でただ一人、主婦として、母として、そしてマネージャーとして一家を支えてきた人の生涯が詳しく紹介されることになった。

文学の研究者や愛好家だけでなく一般の人々の注目も集めているようだ。たとえば、ドイツの総合誌『シュピーゲル』(8号、2003.2.17)、『フォーカス』(9号、2003.2.24)でも数ページにわたりにかなり詳しく紹介されている。さらに面白いのは、女性誌『ブリグッテ』(5号、2003.2.12.)でも著者のインタビューを添えて紹介されている。かなり広く関心を集めているようだ。そのうちのまず一冊を取り寄せて読んでみた。(『トーマス・マン夫人』イング・イエンス、ヴァルター・イエンス共著)

彼女の生涯や人となりについては、それまでも多くの人たちの証言を通して知られてきた。しかしそれはすべて作家トーマス・マンの妻という観点であった。この本で彼女は脇役から主役になった。

夫と出会う前の彼女はミュンヘンでも指折りの資産家で、芸術の愛好家でも知られる大学教授の娘だった。高名な作曲家や画家が足繁く通っていたサロンの中で育った彼女は、その知性と美貌から多くの才能ある若者から求婚されていた。そんな華やかな環境の中で生活していた彼女が突如大学生活も中断し、結婚して家庭に入った。望むものはほとんどすべて手に入れることの出来た彼女はよき妻として、また6人の子の母親として生きることを選んだのである。作家である夫のマネージャーとして粘り強く出版社と交渉し、夫が創作に専念できるように多くの雑用を引き受け、運転手の代わりになるように免許も取った。こうした彼女の献身的な活動はこれまでも知られてはいたが、改めてその活動の内容が具体的に紹介されると、彼女なしには作家マンはありえなかったことがますます明らかになってくる。

そして今回初めて知ることが出来たのは、亡命以降の彼女の心のゆれとその孤独さである。彼女は、夫と違いアメリカの亡命ドイツ人たちになかなかなじめなかった。戦争が激しさを増していく中で頼りの子供たちは次々と危険な戦場に向かい心細さはつのるばかり、そして亡命先を転々とする生活の中でもいつも一緒だった夫は70歳にして肺がんの手術を受けることになる、あの人のいない世界なんて考えられない…。そして戦後は、夫を進めるヨーロッパ帰還への試みにも、ためらいを見せている。

彼女は、夫トーマス・マンの死後、長く彼女自身の人生を生きた。彼女を訪ねた人はみな彼女の魅力について語っている。決して夫と競争したのではない、夫に常に協力することで彼女の人生を生きたのである。この伝記は彼女の物語であると同時に夫との共同の物語でもあったのである。

そしてこの伝記が注目を集めたのにも、もうひとつの理由がある。この伝記の著者も一組の夫婦である。夫は、作家・批評家でチュービンゲン大学の教授ヴァルター・イエンス、妻はやはりドイツ文学者のインゲ・イエンス、この伝記もまた美しい共同の作品である。男と女が競うのではなく、共に生きる時代の証明のように思える。

(島田 了)

フランス

教員のストはなお続く (2003年5月5日)

教育関係者のストライキについては、『語研ニュース』前号で伝えしたが、一連の部分ストライキの発端は、文部大臣リュック・フェリが、『学校を愛するすべての人への書簡』と題する本を出版、全国の教員80万人に対し2002年4月16日無料で送りつけたことにある。財政難の折、大臣といえども個人的な考えで書いた本を送るのに公金90万ユーロを使っていいものか、まず激しい批判が起きた。

現在の教育基本法は、1988年5月の選挙で社会党のミッテランが大統領に当選すると、同じ社会党のロカール内閣のジョスパン文部大臣が89年「教育システムの中心に生徒を」というスローガンのもと、従来の知識伝達機関としての学校の教育を生徒それぞれの個性を伸ばすものへ、教育の機会均等を保障するものへ改革しようといわれたものである。

教育制度では、6歳からの子供が入る小学校が5年、コレージュと呼ばれる中学校が4年、リセという名の高校が3年、その上に高等教育として6年3期に分かれる大学がある。義務教育は6歳から16歳まで、すなわちリセの1年・第2級までである。その間、コレージュの最後の2年間に進路指導がおこなわれる。この指導によって、生徒は、将来バカロレアと呼ばれる中等教育修了試験＝大学入学資格試験を受験する者が入るリセと職業

教育リセとに進学先が分けられる。

フェリ大臣はこの基本法の条文15ほどを変えようともくろんでいる。彼の意見では、「教育システムの中心に生徒を」という原則はデマゴジック(大衆迎合)である、というのである。

まず、生徒を教育の中心にしすぎた結果、教師たちは、恵まれない子の行く学校では生徒の心理的社会的問題に深入りせざるを得ず、その結果教えることが手薄になっていること、さらに、恵まれた学校の親たちの場合、子供の才能開花や独創性の発揮あるいは様々な要求のことを考える際、学校側の知育教育を問題にしてくる、特に初等、中等教育においてこの緊張感がみられることを問題視している。小学校を出ても、読み書きが十分でない生徒が多い。学力低下により86年などは中等教育修了者(バカロレア合格者)は31.2%まで下がったことがあったが、1990年から95年の間は63%に定着、これを80%にまで高めようというのが、左右党派の一致した目標であるが、現実にはそうっていない。これがフェリのこの本での懸念の中心である。

フェリ大臣は、知識が中心にある伝統的な教育モデルの擁護者、学校の利用者ではなく教師たちの味方に回る者のようにみられている。また、フェリは、問題児となるつましい家庭の子や移民の子をできるだけ早くふるい落とし、職業教育の方へ向けようとしているのだとも批判されている。保守派の穏健なブルジョアのための一流の学校を守ろうとしているというわけである。

これらの批判に対し、フェリは、この本はフランスの学校の将来について議論の場を提供することが目的である、と主張しているが、ある識者は、これは嘘で、本当の問題から注意をそらそうしているのだ、と反論している。つまり、文部省の事なかれ主義と財政麻痺からである。その証拠に、知識と生徒を対立させるなどおかしなことで、教師の役目とは、いつであつても子供に早くから知識を受け入れさせること、その点で子供の要求を低めてはならないと考えてきたこと、また、2002年の新学期から実施した小学校のカリキュラムでは、目標水準を高くして、フランス語の習得を中心に据えたこと、このカリキュラムを作った当時国家カリキュラム委員会の議長だったフェリは、1923年以来学校カリキュラム改革の最も重要なも

のと発表していたではないか、というのである。

教育財政の行き詰まりから、地方分権化を言い出したのだ、配置転換、5000以上の生徒監督ポストの削減、教員採用計画の数年にわたる中止などが計画されているではないか、というのがデモ参加者の意見である。教育の質の低下も心配される。どう収まりがつくのであろうか。（河原誠三郎）

中国

驚きの発見、山東省に「地下大峡谷」が

山東省沂蒙山地の中腹に位置する沂水県で、驚いたことに「地下大峡谷」が発見された。洞窟は、長さが6100メートル、最も高いところで30メートルに達することがすでに明らかにされている。両壁は刀で削ったようで、景観は比較的集中し、地下を流れる河は曲りくねりながら遠くまで流れている。地質学者の考証によれば、中国でも唯一無二とも言える大峡谷に属し、「中国地下河漂流第一洞（中国における地下河川が流れる洞窟のなかでも第一のもの）」「江北第一長洞（長江以北における第一の長い洞窟）」と讃えられている。

発見された峡谷は、沂水県の西南8キロメートルのところの、景色の美しいことで広く知られている九頂蓮花山の山麓に位置し、およそ6500万年から2億3000万年前に形成されたものと推定される。洞窟全体は、西北から東南へ走向する巨大なカルストの隙間に沿って形作られている。洞窟内にはさらさらと水が流れ、筍や滝、竹や花など、奇妙な形をした様々な鍾乳石が数多く見られる。峡谷内は、全部で17の景観区域に分かれ、ひとすじの河川の流れ・五つの関所のようなところ・六つの滝・七つの峡谷・九つの泉・十二の宮殿のようなところなど、160カ所のビュー・ポイントがある。とりわけ地下を流れる河川は四季を通じてどこまでも流れ、中国の北方の洞窟では実にまれなものに属する。

沂水県の関連機関は、この峡谷に潜在する性質を深く認めるに至り、洞窟の専門家や観光業の専門家を招き、幾度も議論を重ね計画を練り、観光関連の重要な事業として組み入れることにした。観光区域は、3.8平方キロメートルの面積を計画しており、総額8200万元を投資、そのうちの1600

万元を第一期工事にあてる予定。考証によれば、洞窟内の開発プロジェクトは、中国国内においても最大の規模に属し、旅行者は洞窟内から河川の流れによって洞窟の外に直接出ることができるとのこと。

（『光明日報』2003年3月26日の記事より / 矢田博士訳）

韓国

韓国の離婚率、世界第2位に

2002年10月2日に、国連等、世界の主要機関の経済・社会に関する統計をもとに分析した韓国貿易協会の報告書が発表された。この報告書によると、韓国の離婚率は、経済協力開発機構（OECD）加盟国30カ国中アメリカ、イギリスにつき第3位を占めていた。過去1年間に裁判所が受け付けた離婚訴訟だけで49000件、すなわち1日に135件に達している。全体では、2.4組が結婚する一方で1組が別れている計算になるという。

ところが、2003年3月27日に韓国統計庁が発表した統計によると、1日平均840組が結婚し、398組が離婚している。すなわち、2.1組が結婚する一方で1組が別れている計算になるのである。これは世界第2位を占めるという。過去10年間で離婚率は2倍に急増したということである。

離婚理由の主要なものは、性格の不一致、家族間の不和、経済的問題などであるが、首位を占めるのは配偶者の不倫であるという。どうして韓国で離婚が多いのかと、ある韓国人に筆者が質問したところ、少し考えてから、「韓国人は気が短いからかなあ」という答えが返ってきた。これは多分冗談であろう。2002年12月25日に放送されたKBS・9時のニュースでは、女性の社会進出が拡大し、価値観の葛藤が大きくなったこと、社会全般で離婚を受容する姿勢が変化し、離婚についての考え方が変わったことを、離婚急増の理由として挙げている。

なお、韓国特有の問題として、離婚によって夫婦関係だけでなく子供関係まで断絶してしまう場合が大部分であること、財産分割や慰謝料・養育費の支払いがきちんと履行されないケースが増加していることが指摘されている。（田川光照）

第8回 外国語コンテスト

英語部門

2002年度外国語コンテストの英語部門は、11月27日（水曜日）午後4時40分から第1研修室において実施されました。審査員に本学名誉教授池裕先生、本学教授ジョン・ハミルトン先生をお迎えし、本学助教授多田哲也先生の司会・進行のもと、15人の参加者たちが熱演を繰り広げました。十分な準備・練習をしてコンテストに臨まれていたのが良くわかる、意気込みの感じられる発表が多く、レベルの高い競争となりました。

コンテストでの発表内容には選択の幅があり、審査員も聴衆の人たちも、いろいろな内容の英語に興味深く聞き入っていたようです。発表内容としては15人中13人の人が、指定された6種類の課題から1つを選択しました。選択された課題の内容は、ゴア元副大統領の演説の一部、短い楽しい物語、テクノロジーについての論説文、ワールドカップに関する新聞記事など、多岐に渡りました。参加者はそれぞれに課題文を読み込み、筆者の気持ちを理解し、壇上から説得力を持って語りかけていました。指定された課題以外では、自分で作ったスピーチ、自分で選んだテキストから暗誦という選択肢を選んだ人が、それぞれ一人ずつであり、内容・気持ちがよく伝わる発表でした。

途中、休憩が入り、ハミルトン先生から大きなケーキと紅茶が出され、なごやかなティータイムのひとつとなりました。その後、発表の続きがあり、そして審査員の先生からの講評と結果発表となりました。

審査の結果、1位は自作のスピーチでアメリカでのホームステイの経験をもとにホストファミリーについて語った松元香保里さんでした。ホストファミリーと過ごした時間を、ホストファミリーへの

感謝の気持ちを織り込みながら、正確な発音とすぐれたイントネーションで発表され、聴衆をひきつけていたのは見事でした。2位はゴア元副大統領の演説の一部を暗誦された白鷺さん。審査員の先生はゴア元副大統領の気持ちがよく伝わる感動的な英語と、褒められていました。3位の木村恵さんは、テクノロジーについての論説文を暗誦され、長い単語の多い難解な部分もある文でしたが、原文の難解さを感じさせず、審査員の先生も強い印象の残った発表のひとつとおっしゃっていました。残念ながら入賞にいたらなかった人の中には僅差の人も多く、また、今後の健闘を楽しみにしています。これからも機会をみつけて、英語に親しみ、英語を発話し、そしてそこから学ぶ面白さを感じてください。

(小坂 敦子)

ドイツ語部門

2002年度名古屋語学教育研究室主催第8回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2002年11月29日（金曜日）の午後4:40分より名古屋校舎中央教室棟203教室でおこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回の課題は、基準が明確になるようにひとつのテキストに絞るということで、ドイツ語の統一テキスト“Gabi und Frank”から、“Wir beschreiben ein Bild”というタイトルのFrankfurt a.M.を紹介する文章を選びました。文章は平易なものですが固有名詞が多いのと、記述文ですので会話や物語文と比べて少し単調になりがちかもしれませんが、テキストに写真があり具体的なイメージはつかみやすいものと思われまます。

また今回は審査員に、ネイティブ・スピーカー

である法学部客員助教授であるツォウベク先生に加わっていただき、より正確な審査になりました。審査方法は、ツォウベク先生と私（島田）の二人でおこない、表現力と発音・アクセントの合計点で審査しました。

参加者は、申し込みが10人、そのうち9名が本選に臨みました。テキストはすでに一年次の授業で学習した内容ということで、発音・アクセントに関しては非常に完成度が高く、さらに高いレベルで表現力を競う争いになりました。これらすべて練習の成果を明らかにうかがうことのできるものでした。

非常に接戦となりましたが結果は、第一位（優勝）島敬雄君（01J1399）、第二位榎谷太一君（01J1312）、第三位石川雅英君（01J1142）となりました。

ドイツ語の履修者自体が決して多くはないため、参加者の数も他の言語に比べると多いものではありません。この点は反省点として、次回はより多くの参加者が集まるように工夫したいと思います。しかし法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心とした愛知大学名古屋校舎で、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員としてとてもうれしく思います。

意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげでこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。最後になりましたが、審査員を引き受けていただいただけでなく学生の練習を熱心にしていただいたツォウベク先生に改めてお礼を申し上げます。

（島田 了）

フランス語部門

第8回外国語コンテスト・フランス語部門は、2002年11月25日、15名の学生が参加して開催された。今回もまた、残念ながら前年までと比べて参加学生数が減少している。参加学生は1人の3年生を除き、全員が2年生であったが、その3年生の学生が前年度に次いで今回も1位となった。参加者の60%が法学部の学生であり、残りが経営学部の学生であった。

コンテストの課題は、ペローの童話『赤頭巾』の一部を朗読するというものであった。前年度のテキストと比べれば、今回のテキストは相対的に易しいと思われる。それほど難しい発音はなく、同じ言い回しが何度も繰り返されるからである。1回目（予選）は6名の優秀者を簡単に選び出すことができた。

2回目（決戦）はもっと難しかった。準備なしにテキストを読まなければならなかったからである。この2回目のテキストは、アダモのシャンソン『サン・トワ・マミー』の歌詞であった。特に難しかった点は、発音と、朗読のスムーズさに欠けること（すなわち、ためらいのために朗読がたどたどしくなること）にあった。この決戦でのジャッジは明らかに難しかった。しかしながら、教員間で相談の結果、入賞者を次のように決定した。

1位：肥田晴司（00M3304）

2位：植村 舞（01J1311）

3位：木本克良（01J1028）

（ラッセン）

中国語部門

中国語コンテストは、2002年11月21日（木）の13時30分より209教室で行われました。今年は「法・営部門」が先行し、32名の学生が挑戦しました。課題文の朗読ですが、2年生以上は中国の大学生活などを紹介する内容で、1年生は「私の一日」を紹介する内容でした。出場者たちはベス

トを尽くして、正しく中国語を読もうと努力しました。例年とちがい、車道校舎で学ぶ法学部2部の学生が7名も出場し、「今回こそ第1位から第3位までの賞を独占したい」と、意欲満々でした。それに対して、名古屋校舎の学生もまた「絶対に負けたくない」と対抗しました。熱戦の結果、第2位と第3位は法学部2部の学生が獲得しましたが、第1位は名古屋校舎の三井啓史さんが獲得しました。「どうなるかなあー」と、私たち審査員もドキドキして落ち着きませんでした。

続いて「現中部門」が行われました。昨年より出場者は大幅に増え、25名でした。「現地プログラム」が第2 Semesterから第3 Semesterに移行した関係で、1年生(現2年生)の出場者は21名もいて、その熱気で会場の雰囲気は一段と盛り上がり、活気で満ち溢れていました。今年の課題文の暗唱は「桃太郎」の冒頭の部分でした。中には「おじいさん」と「おばあさん」の対話もあり、出場者たちはみごとに読み分け、プロのような語りでした。お世辞ではなく、どなたも上手で、優劣がつけにくく、審査の先生がたはみなさん頭をかかえていらっしやいました。ただ、その中で中国人の審査員をも感心させたのは鈴木志織さんの語りでした。声調(中国語のリズム)の正しさ、上手な間の置き方、おじいさんとおばあさんの声色、終始笑顔で語る表情など、ほんとうに文句なしの、完璧なものでした。第2位と第3位は男子学生が獲得しました。これは最近では珍しい(?)ことと言えるでしょう。一方、自由部門の参加者は3名で、最後まで暗誦できた1年生の小栗愛香さんが第1位を獲得しました。

審査の結果は次の通りです。

<法・経営部門>

- | | | |
|-----|----------|-------|
| 第1位 | 01J1107 | 三井 啓史 |
| 第2位 | 01SJ1002 | 原田 大輔 |
| 第3位 | 01SJ1103 | 武田 浩靖 |

<現中課題部門>

- | | | |
|-----|---------|-------|
| 第1位 | 02C8038 | 鈴木 志織 |
| 第2位 | 02C8013 | 鈴木 啓道 |

- | | | |
|-----|---------|-------|
| 第3位 | 02C8096 | 久野 晴仁 |
|-----|---------|-------|
- <現中自由部門>

- | | | |
|-----|---------|---------|
| 第1位 | 02C8150 | 小栗 愛香 |
| | | (中川 裕三) |
| | | (鄭 高咏) |

韓国・朝鮮語部門

第8回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」本選は'02.11.21木、開催された。今回は初めて「歌」(사랑해、サランヘ、愛しています)を課題とした。

参加者は20名。課題曲「サランヘ」は、日本のカラオケのどこでも歌える。学生諸君が卒業して社会人になったあとも、「韓国・朝鮮語」を勉強した証として、会社の同僚などとカラオケに行った際、自由に歌える韓国の歌が一曲ぐらいあってほしいという願いもあった。

審査員は、陶山信男名誉教授と常石、それに実質的には韓国・朝鮮語がネイティブである留学生、金 成哲君のアドバイスをもらった。

今回も車道校舎から2名参加。その一人、崔奇さんは60歳を優に超えておられる貴婦人。もちろん、「外国語コンテスト」の最年長者、「新記録!」である。本コンテストは今後さらに発展し、歴史を重ねていくであろうが、果たしてこの記録はいつ破られるのであろうか。

審査の結果、入賞者は以下ようになった。

- | | |
|----|----------------|
| 1位 | 宮代和代 (01M3376) |
| | 井上友美 (01M3395) |
| 1位 | 金沢洋介 (01M3005) |
| | 尾和克洋 (01M3454) |
| 3位 | 木村 恵 (00M3405) |

(常石希望)

日本語部門

第8回外国語コンテスト「日本語部門」は、211教室に於いて、11月21日木曜日11時30分から2時間にわたって行われました。法学部、経営学部、現代中国学部の外国人留学生の1、2年生15名が、自分の身近な出来事から学んだ日本の実態についてスピーチしました。「にんにく」「私が感じた日本」「桜の国の道」「お互いについての関心」「日本の外食産業」「私のお母さん」「2002年6月くれたもの」「日本の若者」など多種多様な角度からのスピーチは、異国の人でなければ決して気づかない内容ばかりで、どれも興味深く、これまで学習した日本語を駆使して思いの丈を伝えようとする一人一人の学生の真摯な姿は、聞いている者の心に深く訴えるものでした。審査の結果は次の通りです。

- 1位 02C8222 干 莉莉 「私のお母さん」
 2位 02M3520 白 宇 「私が感じた日本」
 3位 01C8220 羅 忠逸 「お互いについての関心」
 (山本雅子)

この後に1位と2位の学生のスピーチを掲載します。読んでみてください。

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 私の日本のお母さん
 現代中国学部1年生 宇 莉莉

二年前の10月18日。ちょうど私の誕生日の日に初めて日本にきました。誕生日の日に日本に来たのは偶然でした。しかし私の心の中にはずっとこれは私の新生という特別な意味の暗示じゃないかなという考えがありました。それで自分の心の中にこういう考えがあるので日本へ来て、何があっても前向きにがんばろうと私は心の中で決めました。自分を超えたいと思いました。日本語の勉強

から始まった日本での留学生活が私には特に別の意味がありました。それは私が私の日本のお母さんに会ったということです。

日本語の勉強のために日本にきて三ヶ月後私はアルバイトをしました。あの頃の私は日本語をたった三ヶ月しか勉強していなかったのであまり話せませんでした。話をきいてわかってもうまく答えられませんでした。店は小さくてお客さんも少ない。いつも私とお母さん二人だけで働いていました。しかし日本語が下手な私にとってはなかなか働きにくいと感じました。仕事がよくできるようになるために私は小さい紙で仕事用語を書いてポケットの中に入れて仕事の時、時々紙をみながら話しました。店が暇なので時々私が学校で勉強した新しい言葉も仕事用語と全然関係がないのも紙に書いて店に持っていきました。ある日店長としての彼女にみられてしまいました。その日店がすごく暇でした。九時すぎてもまだ誰もきませんでした。友達からよくきいていたことがあります。それは“暇な時は店の人がこわいよ。よくおこるよ”ということでした。私は首にされるかなととても心配になりました。自分が日本語を話せないし仕事の態度もまじめではない。ときと彼女は考えるだろうと思いました。しかし意外なことに彼女はその紙を見ても私をおこらなかつたのです。その上“意味がわかる？”と私にききました。“わからないならいってね、教えてあげるよ”と言われました。“日本語はむずかしいでしょ？本を持ってきたの？みせてくれる？私も勉強を助けてあげられるかもしれないね？”その日から私は毎日仕事に行く時、本やプリントなど色々な資料をもって店で勉強をしました。彼女はできるだけたくさん教えてくれました。いつからか彼女を店長と呼ばなくてお母さんと呼んでいました。私自身もしらないうちのことでした。彼女のおかげでその年、私は日本語能力試験一級に合格しました。その日お祝いのために二人でパーティーをしました。その日私は始めて彼女の前で泣きました。「あなたはがんばってたよ。これはうれしいことだよ。泣かないでこれからまたがんばって大学を受けるま

でがんばらなければならないよ。お母さんも嬉しいよ」あの時私は何も言えませんでした。しかし、彼女の笑顔を深く覚えています。彼女は私が大学を受ける前に私と永遠に離れました。大学の合格の通知をもらった日、私は前彼女と一緒に働いた店の前に行きました。しかし彼女の姿はどこにも見えませんでした。

彼女と一緒にいる間、日本語の勉強だけではなくて人間の価値観、世界観なども学びました。彼女の私への影響は本当に大きかった。

私は日本に来る前テレビや新聞や友人の話から日本の社会に対する認識をもっていました。両国の歴史が原因で中国人は日本の社会にとけ込むことができないとか、日本人と親友にはなれないとかいろいろをききました。しかし彼女との出会いは私に人間と人間の関係は国を超えるということを教えてくれました。“歴史は歴史、現実 is 現実”これは私が日本に来た二年間での個人的な新しい認識です。日本の社会にとけ込むことができないということはありません。これからまた日本人とたくさんいい出会いをしていこうと思います。

お母さんに対する私の気持ちはあの歌がよく表すと思います。

さよなら 大好きな人
 くやしいとても かなしいとても
 もう、かえってこない
 それでも私の大好きな人
 何も忘れられない 何も捨て切れない
 ずっとずっとずっと 大好きな人

第2位 私が感じた日本 経営学部1年生 白 宇

私は日本に来てもう2年になりました。この2年の日本の生活で私が感じた日本について皆さんに話したいと思います。

私は2000年10月に京都に着いて留学生活が始ま

りました。秋の京都が本当に素晴らしいでした。私の国には、冬の風まだ強いのに京都もう暖かいでした。最初の印象は、きれいな環境、新鮮な空気、緑の山、ピカピカな車。この優しい環境の中にいるので、外国にきていた不安が全く感じず、将来の留学生活にも自信が持っていました。

大体三ヶ月後、生活のためアルバイト探しが始まりました。一つ一つ真剣に面接したのに、一つ一つに断れました。原因はただ一つ、外国人だから。希望が潰されたとともに、心の中に日本のきれいな印象も潰れました。間違いのない、日本はきれいな国、希望がある国、でも第一なのは、日本は日本人の国。その時、私はこう思いました。友達のお陰で、私は引越し会社に入りました。これで、私は初めて日本の社会の中に入りました。毎日寝ないほど頑張っていた日本人の姿を見て、日本は強くなる理由が分かりました。中国人は駄目と言われないように私も彼らと一緒に毎日5時間しか寝なく、5キロ痩せて一ヶ月ぐらい働いていました。お金を稼いだ同時に、尊敬ももらいました。でも、お正月が終わって会社が暇になって、私もクビになりました。

日本人と一緒にいるうちに、嫌な人がいましたけど、もちろん友達もできました。前のバイト先で、筒井という人と友達になりました。一人の留学生活が淋しくてつまらないでした。でも、筒井さんと知り合ってから、いつも彼の部屋にいて、ビールを飲みながら喋って、笑って、とても楽しいでした。いつの間にか、日本語もうまくなりました。私は昔からバスケットボールが大好きでした。でも、日本に来てからバスケットボールの番組が見られないでした。これを知っていた彼は、NBAの試合のビデオを撮ってくれ、僕の部屋と一緒に見ました。嬉しくて感動しました。二人の間に深い友情ができたと思いました時、あることが起きました。私は大学を合格しましたので、引越しをしなければなりません。でも、荷物が多くて、引越し会社に頼みましたらとても高い。この時、彼は自分の車を出して手伝ってくれました。感謝の気持ちを伝えたいと思う時、彼に

金が要求されました。必要の経費だけではなく、また2万円要求されました。私はとても失望しました。友達だから手伝ってくれるじゃないか？やっぱり友情より金のほうが大事だと思いました。でも二人はここまでではない。今でも連絡しています。これも日本人の考え方だと思いました。友情は友情、金は金。また勉強になりました。

これは、私は日本で遭って、代表的なことであります。日本は社会が進んでおり、安定です。人は勤勉であり、開放的です。でも、日本はもう一つ違う顔を持っています。外国の影響を受けているのに、外国人を排除します。日本人は礼儀に正しいのに、人情に薄い。この全く違う二つの顔はまさしく日本の魅力であります。これは、私の個人的な考えであります。正しいか分かりませんが、皆さんに聞いていただいて、ありがとうございました。

03公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会主催・
愛知大学語学教育研究室共催

<2003年度後期>

場所：ナオリ会館

(461-0002 名古屋市東区代官町27-5。052-935-6011)
(地下鉄桜通線「車道」下車、1番出口より徒歩7分：
市バス52系統[栄～新守山]・121系統[栄～砂田橋
經由上飯田]「水筒先」停留所下車徒歩3分)

時間：午後2時半～4時半

聴講無料

10月4日(土)

「言語学という思想 ソシユールとサビア」

高橋 秀雄(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

11月8日(土)

「看板広告における経路探索の方法」

片岡 邦好(愛知大学法学部助教授)

12月6日(土)

「文法と文脈 談話情報が動機づける統語構造」

須田 淳一(愛知大学短期大学部助教授)

2004年1月10日(土)

「ドイツ語と英語の並列関係について」

トーマス・M・グロース(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

編集後記

今回は特集を設定していないが、中国とフランスに関する記事が二編ずつ、韓国と英国が一編ずつの計六編、それもアジア三編とヨーロッパ三編となり、バランスが良くなった。

春学期もあとは定期試験を残すのみである。約二カ月に及ぶ夏期休暇中に、外国語から遠去かっていると、折角の春学期中の学習が水泡に帰すこととなる。できれば外国語のインプット(読むことと聞くこと)は毎日続けよう。語学は才能ではなく、単に持続力である。

(M.T./S.A.)